

【緑地を楽しむ本】

『エルシー・ピドック、ゆめでなわとびをする』

エリナー・ファージョン 作 シャーロット・ヴォーク 絵 石井 桃子 訳

岩波書店



9月21日は敬老の日。
エルシー・ピドックは、
ケーバーン山のふもとの
グラインド村に生まれた
女の子。村の女の子はみ
んな、なわとびが好き。
エルシーも3つになると、
おとうちゃんのズボンつり
でとびはじめ、誰もが認
めるなわとび上手になっ
ていきます。

ケーバーン山にはなわとび好きな妖精たちが住んでいて、「なわとび師匠」のアンディ・スパンディまでいました。エルシー・ピドックはこのアンディ・スパンディの目にかない、毎月、三日月の晩にケーバーン山でいろいろななわとびの跳び方を伝授されるのです。寝ている状態で。夢遊病という感じでしよ
うか。その跳び方とは、二重跳び？ 交差跳び？
いえいえ、そんな普通の跳び方じゃありません。
高とび、するりとび、おそとび、心配ごとはねとばせ
とび、強とび・等々。1年を終え、免許皆伝となり、
その証にアンディはエルシーのなわとびの片方の柄

をさとうのキャンディに、もうかたほうはアマンド入り
あめんぼうに変えてくれるのです。一生なくならな
いキャンディです。

そうして時は経ち、ケーバーン山の持ち主が変わ
り、工場を建てる話が持ち上がります。村人た
ちは反対しますが、領主はまったく聞く耳を持ちませ
ん。ある日、村の女の子の夢にアンディ・スパンディ
が現れ、「領主に、ケーバーン山でなわとびをした
ことがある者がひとりのこらず、なわとびをとび終え
たら工場を建て始めていい、と言え。」と言います。

領主はこの申し出に、いい余興だと同意します。
代々、山でなわとびをしてきた昔の、そして今の女
の子たちが少しでも長く跳ぼうと頑張ります。最後のお
ばあさんがつなを落とし、領主がレンガを埋めようと
したその時、109才のエルシーが現れるのです。あの
キャンディの柄のなわとびを持って。

三日月の晩に山でなわとびをする、というのも幻想
的。この間、散策した平和台から柿生方面にぬけ
る山でエルシーがなわとびする姿を想像してしま
いました。

(遠藤)